

Title	郷土地理研究(小田内通敏著, 刀江書院發行)
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.3 (1930. 9) ,p.155(511)- 156(512)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300900-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

永年七曜曆及び同原理 (柳一宣著)

柳一宣氏の考案にかゝる專賣特許第八三六一號「永年七曜曆」は縦二七横一八センチ、厚紙二つ折大であつて、その表面に自己の求むる年月日の何曜日なるやを表示し得る仕組になつてゐる。ユリウス曆にしる、グレゴリウス曆にしる、その求むる處の西曆年號を、百位の數で切つて、前部を厚紙内側の大圈内の同一數字に、後部をその小圈のそれに合し、指標を求むる月に合せば直にその年月の全曜日を知ることが出来る極めて簡單なる装置である。たゞ我等にまつての問題は之が太陽曆なることと西洋紀元によつてゐることであるが、最近百二十年間については、日鮮の紀年に對する對照表が圖示せられてゐるので、明治六年以後の我國の年月日については譯なくその曜日を知り得る。その以前に對しては之を西曆に換算するの手續を要するのみである。

本邦、中華民國等の曆に於ける干支が年號に拘らず連續絶ゆることなく循環してゐる如くに、洋曆の七曜も亦た連續し、ユリウス曆からグレゴリウス曆へは日數を飛ばして推移した場合にも曜日だけは其の連續をつゞけたのであつて特殊の意義を有するものであるが、殊に泰西の日常生活と密接なる關係にある曜日を檢索することは、西洋の史料或は事實の考證に役立つことが大である。

本表と共に「永年七曜原理」(菊判本文八七頁)が發行せられてゐて、永年七曜曆を生むべき原理が、數學的に幾多の定理(例へば「或る曜日の目附に7の若干倍を加ふるも減ずるも其曜日は變はることなし」)を掲げ、一々之を證明してある。頗る興味ある本書の價値は、前東京天文臺長平山信博士の序文中に盡されてゐる。即ち、「惟ふに、永年七曜循環に關するものは、泰西既に其數ありと雖も、君の案出せしもの、其價値又之れに劣らず、其理は正確にして、説くところ平易、その器は簡にして、よくその要を盡せり。特に君が全く獨創を以て、遂に此原理を究め得たるは一に君の努力に由るものにして、學究の徒等しく範すべきところなり」とある。

朝鮮人中の數理の天才たる氏が、この發明を完成し、而も名利に馳せずして、永年の苦心に成ることの考案より生ずべき利益を擧げて、内鮮の教化及び社會事業に捧げられたことは、大に奇特なことである。

本表は、之を座右に供ふるに於ては、その儘、我等の日常生活の用を便するのみならず、一般史家にまつても利益と興味を與ふることの少なからざるべきを思ふて爰に一言紹介の勞をこる。非賣品、名古屋市中區丸屋町三丁目十六番地恩寵社發行。(間崎万里)

郷土地理研究

(小田内通敏著)
刀江書院發行

近時地理學、殊にその人文地理學的研究が、我が學界の一部に

盛ならんとするの傾向は愉快な現象である。随つて之に關する著述も遽かに増加し、既に月刊雜誌「郷土」も刊行せられるに至つた。斯様な現象は、一つには従來の空疎なる議論に飽き果てた人心が實證的研究に心を寄するに至れる傾向の現はれでもあらうが、また高級學校増設の結果、地理學に關する講座科目の急増と相俟つてその専門研究者の増加したことが斯學の進歩を促がし、従來の研究その物から轉じて人文地理學的方向に重心を置くに至つたためでもあらう。さうして、是等の傾向を導くに與つて力のあつたのは、早くから斯界に名聲を馳せてゐた本書の著者小田内氏の如き人々の努力によるのである。

本書は、著者が「長い間の思索と體驗を通じて、常に郷土の人文地理學的考察の研究に努めて來た論考と、臨地實證に用ゐた調査方法との記録」(序文六頁)であつて、本書の内容は三部に分たれ、その前半を占むる「郷土としての村落と都市」は、郷土の研究過程から村落立地の考察、村落社會の地理的要素、地理的環境としての土地、都市地理研究、風景形態としての都市、都市的人口集團の一考察を含み、著者自からの意見を窺ふべき本書の主要部分である。本書の後半は、「郷土地理への學的根據」として、之に關する學界の傾向を紹介することを目的とし、ルブリーの思想と地域研究、地域と國と境界、イギリスの地理學的思潮、ドイツとロシアの郷土教育、フランスの地理教育等について、歐米の學者の意見を補綴して、簡潔にその要旨と印象を傳ふるに努め、最後に、「郷土地理研究項目」として、郷土觀察項目、ルブリーハウスの地域調査項目、合衆國の臨地觀察項目、フランスの町村部落並に獨立家

屋の研究細目を掲げ、以て實地研究者の便に供し、加ふるに三十個の圖版を挿入して本文の説明に資してゐる。

「地と人」の關係が、文化的社會科學、殊に史學にまつて、重要であることは誰も知る如くであつて、その綜合的研究を完成せんがためには、その小なる單位の研究の進歩に俟たねばならない。人事の活動の大なる舞臺としての地的環境を明かにするがためには、我等が何等かの形式で常時觸接しつゝある各自の郷土の研究から手を初むべきである。従來本邦に閑却され勝であつた實物教育の缺陷を補ふのには、郷土に親しみ郷土に理解を持たせることに如くはない。本書の流麗なる文章は知らず識らずの間に讀者に郷土地理の研究指針を會得せしめ、實地についての研究心を喚起せしめる。地域の進化としての郷土の地理的認識を求むる若い學徒と教育者、殊に地方の青年子女に……捧げんとする」(序文六頁)著者の目的は、本書に於て、十分に達せられてゐる。(間崎万里)

支那研究

(慶應義塾望月基金支那
研究會編、岩波書店發行)

輓近我が國に於ける支那研究は旺盛となり、之が研究機關も逐次發達を見るに至つたが、われらが歐米に於けるそれと比較する時、そこに遺憾に堪へない幾多の點を發見する。

歐米に於ける支那學の近狀如何。かの亞米利加に於ける支那學者として知られてゐる Latourette 氏は大戦後 The American Historical Review (vol XXVI, No. 4) に Chinese Historical studies during the past seven years を稱する一篇を掲載し、歐米に